マルコによる福音書 1章 12～13節

“ 沈黙の時間 ”

もし皆さんが先月、ここオープンドアで実際に又はインターネットを通して私達とご一緒でしたら、私達が“キリストの沈黙”というメッセージをシリーズで始めたことを思い起こされたかもしれません。

私達が簡単に、キリストが何か大きくて重要なことを言って下さると期待する時、キリストが沈黙を選択されることは、イエス様の御生涯において注目に値するキーポイントです。

これらの沈黙はそれ自体、私達に、独自の方法で大きな声で語っているのです。

人が一人でいる時というのは、他の人がその人を理解するのに、一番難しい人生（生活の）の部分かもしれません。しかしながら、そこで何が起きているかを見ることができれば、その人本来の性格や心について深い理解が得られるかもしれません。人が一人でいることに使う時間は、ある意味、多分その人本来の姿を最も明確に示すようその人が考えて行動する時間です。

しかし、人生におけるそのような部分とは、他の人にとって最も分からない部分かもしれません。でも、その人にとっては、時に、他の人全てに自分を教えるものとなるものです。イエス様を深く理解するには、イエス様がものを言わない時に、イエス様の心に実際に何が起きていたのかを見ていく必要があります。そして福音書の書き手も魅力的な情報を少し書いていますが、その量は通常大変少ないのです。

イエス様が一人でいる時について言える一つのことは、ただ単に辛い人生の現実から逃れる為ではないということです。例えば、それは人生における苦闘から逃れて、良い思い出や空想物語に逃げ込むことでも、又、現実を直視するのを避ける為に、自分の心を何か楽しいことや面白いことに置き換えて充すことでもありません。私達はそのようにするかもしれませんが、聖書の話の中のキリストはそうされません。私達は本当のイエス様をはっきりと見る為にその事の向こう側を（その事を超えて）見ていく必要があります。

今日の聖書箇所では、私達の主イエス様が誘惑を受け荒野で過ごされた沈黙の時間について見ていきます。 マタイ、マルコ、ルカによる福音書ではこの出来事を記述していますが、ヨハネではありません。 マルコでは言及しているものの、他の箇所と同様に大変短く詳細に渡っていません。

イエス様は三つのことで誘惑されています。

a)　石をパンに変える。

b）天使に受け止めさせることを期待して、宮殿の上から身を投げる。

c）悪魔を主とすることで国々の力ある支配者となる。

マタイは上記の順番で誘惑がなされたと記載していますが、ルカでは2番目と3番目が逆です。

私達はこれらの誘惑に対して、最初は、イエス様だから特別だと見がちです。

私は、奇跡的に石をパンに変えたい、神様の救いの力を見せる為にビルから飛び降りる、力ある政治家のリーダーとなる為に悪魔を礼拝する、と言った誘惑されたと感じたことはありません。皆さんはどうですか？　私達は誘惑を受けます。しかしそれは多分他の方法でです。イエス様は独自の奇跡を行う力があり、偉大なリーダーとなる使命を持っておられるので、間違った理由と間違った方法とは言え、これらの聞こえが良い事を何らかの方法でするように言われることは、イエス様にとって、より誘惑的なことだと思います。

私達も よりしっかりと見ていく時、このイエス様の誘惑の中に私達自身を見ることができます。私達も、神様に信頼して自分の必要を満たそうとせず、私達自身の判断でその必要を満たしたいと誘惑を受けます。また、私達は、神様が教えているように人に仕え、何かを作り上げていくことより、自分自身の利己的な方法で権力を得てそれを使いたいという誘惑を受けます。私達はまた、”神様が自分に何をさせたいと思っているか聞く事“ をやめて、その代わりに、“ 何が一番早くて、しかも派手で、最も感動的なこと” かを尋ねるという誘惑に駆られています。

全ての誘惑は、たとえ私達が大勢の人と共にいる時であったとしても、ある意味静けさの中でやって来ます。その性質から、誘惑は、人及び神様との健康な絆から私達を切り離してしまうものです。マルコは13節で、イエス様が一人でいた場所には野の獣がいたと言っています。そこにはイエス様に仕えるために天使もいたのです。どんな人でも一人でいる時には、自分の内側の霊的な生活部分に獣と天使が共にいる時があるものです。そのような時に私達が直面する強い誘惑は黙るということです。なぜならば、私達は悪いことに魅了されている自分を他の人に見せたくないからです。それは他の人には理

解できないことだと考えたり、他の人は認めようとしないだろうと思うからであって、私達が誘惑に打ち勝つのに十分強くなる為には真に最も必要な一つであるにもかかわらず、私達は他の人とコミュニケートする事を避ける傾向があります。

これらのイエス様の誘惑の話から神様は私達が何を得て心に留めるようにと望まれているのでしょう。 その一つは、私達が罪を犯すように誘惑されるのは、私達が悪い人間で、未熟なクリスチャンだからではないということです。

マルコは1章12節後段で事実として、“ 聖霊がイエスを荒野に送った。” と書いています。イエス様は完全ですが誘惑されたのです。私達が誘惑に直面するのは神様の子供に対する神様の良い計画の一部です。しかも、神様の意図は、私達が神様を信頼して誘惑に打ち勝つ力を見つけるということです。その神様の助けによって、誘惑の機会は私達に、罪が本当に馬鹿げていて醜く、私達の生活にダメージを与えるかを、同様に、神様の方法に従う事がいかに美しくそして正しく、元気づけることかを分かるように導くことができるのです。この沈黙の時によってイエス様は私達に誘惑の最良の対処法を例として示されたのです。また、イエス様は誘惑にあう人々を、慰め、力付け、守る力を勝ち取りました。

イエス様はこの40日の多くの部分を神様との祈りの時として使っておられたのは確かです。ですが、父なる神様とのコミュニケーションは、イエス様がこの激しい内部葛藤と訓練の時に行った何かより、それ以上のことでした。イエス様にとっては、祈りとは生きる為の術（すべ）方法であり、継続することだったのです。この静かな時間に神様とイエス様との間に何があったのでしょう？

キリストの祈りにおける一つの見地は疑いなく、天にいます神様との深く強い個人的な関係を築いて維持することでした。聖書では時々このように（マルコ1章35節）言っています。

“ 明け方早くまだ暗い時に、イエスは起きて家を出られ、お一人になることができる場所へ行かれ、そこで祈られた。”

ルカ5章16節では、“ しかしイエスは度々一人で祈られる為に出かけて行った。” とあります。

イエス様がその御生涯を通してどのような人物になったのかを見ることで、私達はイエス様の祈りが御自身を形造ったことの大きなヒントを得ることができます。例えば、父なる神様との静かな時間を過ごす習慣を維持することで、イエス様は、後悔しない、罪と恥か

ら自由に～何故ならイエス様は罪を犯さなかった～生活する人となりました。イエス様は、御自身の過去が御自身を落ち込ませたり、前に進めなくするという感覚を持って過去を振り返る必要がありませんでした。同様に、未来を恐れておられませんでした。十字架が御自身に待ち受けていることを含めて、イエス様には、父なる神様が御自身に望まれた内在する自由と平和の生涯を生きることを止めるものは何もなかったのです。

このようにイエス様は私達の偉大なモデルで啓示なのです。

言い換えると、イエス様は生活するように祈られたということです。それは罪からの自由であり、神様と共にいることを自由に讃え喜んだということです。またイエス様がそのように生きたのは、祈られた故でした。このような感覚（意識）では、イエス様の静かな時間は私達のとは違ったのです。私達は罪のある人間ですから、イエス様と同じ方法でこれらを持つことは可能ではありません。私達は罪の赦しを求めて、信仰を新たにするために、また自分の弱さと人故の罪深さから生じる多くの事のため神様の御許に行く必要があります。しかしキリストが為されることは、私達のための進む方向とゴールを定めることで、それは私達の信仰生活、とりわけ私達の祈りを形作り、活気を与えることができるのです。そして、私達が助けを求めて主の許に行く時、私達は恵み（慈悲）を見つけるのです。そこに望みがあるのです。神様は私達の失敗を私達の人生をもっと満たすことのできる恵みの機会に変えることが出来ます。ここに大きな希望の理由があるのです。

私達は、キリストが行われたのとは別の方法ではあるけれど、キリストが祈りの静かな時間で得たように私達にも受け取るよう用意された同じ暖かく豊かな優しさで、命を与え力を与える神様の愛を受け取るのです。

イエス様の祈りについて他に私達が注意すべきことは、イエス様が弟子を教え訓練することに祈りを使われたということです。福音書を通して読むと、イエス様が一般的な同様の場所で、従ってくる群衆とともにいる時、私的に祈られる為、彼らと距離を取って離れている（視界には入っているが）のを見つけることができます。例えば、マタイ26章38節後段～40節前半では、死なれる前の晩、イエス様がゲツセマネの園で弟子達に、“『ここに居て、私とともに目を覚ましていなさい。』と言われ、少し先に進んでうつ伏せになり祈って言われた。『父よ、できることなら、この杯を私から過ぎ去らせてください。しかし　私の望むようにではなく、御心のままに。』 それから弟子たちのところに戻ってご覧になると弟子たちは眠っていた。 “

それから42節と44節では、イエス様が2回目、3回目に祈られるために ”向こうに行かれた。“ものの、弟子達のところに戻って彼らと話をされたと言っています。この時にイエ

ス様は弟子達に例を示して“言葉で” 困難がやって来る時に祈ることを教えられました。イエス様は、 26章41節前段 で、 ” 誘惑に陥らないよう、目を覚まして祈っていなさい。“ と言われました。

その夜弟子たちは、その教訓を十分に学びませんでした。でも理解するための種は撒かれたと信じますし、実際、聖書の「使徒の働き」で見られるように、後に彼らは祈りの力によってはるかに強い人間に成長しました。

イエス様が祈りを通して教えられることのほかの例はルカ11章1節に見ることができます。

” ある日、イエスがあるところで祈っておられると、終わった時に、一人の弟子が話しかけて来た。「主よ。ヨハネがその弟子に教えたように、祈りを教えて下さい。」と言った。“とあります。

そしてイエス様は、この会話の中の要望に応える形で、その後実際に祈りを明らかに示して、私達が今、「主の祈り」（天にまします我らの父よ・・・）と呼ぶ有名な教えを弟子に教えられました。

イエス様は弟子達にどのように祈るかを教えただけではありません。イエス様の黙っている（静かな）時間の多くは、実際に弟子の為に祈ることによって弟子を助けることに重点を置いていたのです。イエス様の祈りの大きな部分を占めていたのは弟子達に関することでした。イエス様は各々の弟子達を選ぶ前に祈られました。そのことはルカ6章12～13節にあります。

そのような日々のある1日、イエス様は祈るために山裾に出かけて行かれました。そこで神様への祈りのために夜を明かされました。朝になりイエス様は弟子達を側に呼ばれ、その中から12人を選んで使徒とされました。

イエス様は弟子達に、水の上を歩くといった力を実演する前には祈られています。（マタイ14章23節） また、イエス様は ”あなた方は私を誰だと思うか？“ と尋ねられる前にも祈られています。（ルカ9章18節） 山上で変貌され、御自身が弟子を導かれる使命を示される前にも祈られました。（ルカ9章28節）これらの一つひとつの時は全て直接弟子達の ”信仰生活“ に対する何らかの大事な鍵と関係するものです。そしてこの鍵とは、弟子達がイエス様に従って行くことを可能にする信頼するための力であって、弟子達が、イエス様がどのようなお方か理解し、イエス様の使命がなにか、さらに、信頼の中でイエス様に従うという弟子達にとっての招きを理解することです。

イエス様がどの位従ってくる人々の為に、祈りを通して御自身を捧げられたかを見る時、私達も どの位の時間、神様と共にいる静かな時間を通して他の人の豊かな人生の為に祈っているか、自問しなければならないのです。そして時にもっと良い質問は、 そもそもどの位の静かな時間を祈りで神様と過ごしているのか？ というものです。主なる神様、毎日私達の周りの人々の為に祈ることでよりキリストに倣う者となるよう助けて下さい。

一般的に強い個人的な信仰を維持する、そして教えるという方策である祈りに加えて、イエス様は、しばしば祈りによる静かな時間をとても特別な場合における特別な目的の為に使われました。イエス様が重要な決定をする必要があった時、又は、ある問題のために緊張（ストレス）を感じることで、例えば、祈りにより神様とともにいるため一人になるという特別な場合を作るといったようなことです。

例えば、イエス様は、ヘロデ王がイエス様の従兄弟のバプテスマのヨハネを殺させた後、御自分の深い悲しみの時、祈られました。（マルコ6章14節～29節）イエス様は、私達の人生にやって来る喪失の痛みの時、神様の助けを得て私達がどのように対処すべきかをここで私達のための模範となられたのです。この時、イエス様は弟子達をお連れになり静かな場所へ休まれるために出かけられました。（マルコ6章31節）しかし群衆がイエス様らのところに来た時に、イエス様は群衆のために時間を作って、御自身と弟子達が必要としていた静かな時間を先送りしました。群衆が去ってからも、イエス様はそのまま進んで行き弟子達の霊的な必要を満たすことのないまま、弟子達を導こうとされませんでした。イエス様は、祈りに戻られ、この時はお一人で山におられました。（マルコ6章45～46節）

私達は既に、イエス様が12弟子となる者を選ぶ前にどのように祈られたのかを見てきました。

イエス様のとても実践的な祈りの他の例として、ヨハネ6章15節では、イエス様が、群衆が御自身をイスラエルの王にしたがっているように思えた時、お一人になる為、群衆の前から退かれたとあります。

私は北星学園の学生を連れて海外英語研修から帰って来たばかりです。研修の一つはハリウッドへ出かけることで、そこで私達は人々がスター達～例えば、その言動において、並外れた歌声で、また、映画作り産業で最も大きな力を持つことで、最も優れているとされる人々～を尊敬していることを示す多くの場所を見ました。

しかしイエス様は、様々な機会において正に正反対の種類の人であることを選択します。

これはイエス様の弟子達の反応ではなく、ましてや一般の群衆のものでさえなく、イエス様の静かな（沈黙の）時間は、特別な行動と他の人の必要に関係していました。

私達がこれまで見てきた全ての例によって、イエス様がどんなに神様に頼り、信仰によって生活されたかが明らかになりました。イエス様は私達の為にこのような生き方の模範になられています。それは、私達の生活において同じ種別（タイプ）のことを私達がすることを学ぶためです。

私達は重要な決定をする前に神様と共にいる一人の時間を持つことができます。神様の御前に静まる時、私達は自分の中の心配、恐れ、その他の重荷を神様に任せることができます。

私の英語のクラスの学生達が日本に帰るためロサンゼルス空港へ行く準備をしていた時です。その中の一人がチケットを見つけられなかったのです。彼は散々探したのですが、見つけることができず、空港へ行く時間となってしまいました。

このような時、その日私が前もって祈りで神様と共に過ごす静まった時を持っていたか否かが、私の人生に大変大きな違いをうむのです。そのような祈りがなければ、私は思い悩んだり、裁いたりするという罪に本当に簡単に陥ることでしょう。また私は、その彼が長くかかったけれど最期の瞬間にチケットを見つけた時のように、良い事が起こる時、神様に感謝することはあまりなくなるでしょう。

もし、私達が、私達の困難を神様の御手に委ねる習慣を作って維持するなら、私達がする多くの間違いや犯してしまう罪を避けることができます。私達が、私達の特別な必要と決定を神様の御手に委ねることを伴った神様との決まった時間を過ごすことがないなら、結局のところ、最初から神様に相談せずに自分自身の方法で行った故の誤った決定やストレス、疲労、罪悪感、その他のことの対処のため、助けを求めて神様に帰って行くことになるのです。賛美歌で“ 慈しみ深き(What a Friend We have in Jesus) ”では、”失った平安はいくばくか、必要のない苦痛をいくら耐えたのか“ と歌っています。

皆さんは、イエス様に従ってご自分の人生（生活）の主要な部分に神様との静かな時を持つならば、ご自身や他の人の多くの苦痛と悲しみを省くことができるのです。

イエス様は御生涯において非常に多くの静まった時間を作ることを選択されました。イ

エス様に従って行く者として、私達もそのようにする事を学ぶことにより多くの恵みを得ることができます。さあ今、祈りを持って私達がそのようにできるよう神様の助けを求めましょう。

私達の静まる時に来てくださる神様、私達の生活において予想外で満たされていない部分から逃げることなく、一人子イエス様がされたようにそれを見つけ出していけますように助けて下さい。

そこで日々、神様あなたを求めることができるように、またより深く意味がある方法であなたを見つけることができるように助けて下さい。私達の生活で私達が静まる時間を通して、あなたにある厚い信仰を持った人となるよう、私達の決断と懸案をあなたの御手にもっと喜んで委ねることができるよう、そして、私達の助けを必要とする人々をもっと支えて助けることができるように導いて下さい。これらのことを通して、お受けになるべきあなたの御名への栄光を捧げることができますように。このことをイエス様のお名前によって祈ります。

参考

Ainsworth, P. C. (1912). The Silences of Jesus and St. Paul's Hymn to Love. London: C. H. Kelly. Hathitrust Digital Library. Retrieved February 9, 2019 from https://catalog.hathitrust.org/Record/009972910